

博士後期課程から公設試験場へのキャリアパス

The Career Path from Doctoral Course to Public Research Organization

小 杉 重 順*

(Kosugi Shigeyori)

I. はじめに

北海道大学の博士後期課程で学位を得て、現在は北海道の農業試験場に勤務しています。「人材育成」と「キャリアパス」というテーマについて、自身の体験に基づいた原稿の執筆を、とご依頼をいただきました。せっかくの機会ですので、形式張った論考というよりは、私個人の体験、体感に即した率直な感想を述べさせていただきます。

II. 博士後期課程のきびしさ

博士後期課程のことを振り返るとどうしても「つらく、きびしかった」という感想がいちばんに思い浮かんでしまいます。

北海道という広々とした土地、農学部の実験環境の中で、学部生のころは勉強が楽しく、このまま研究の道に進みたいと大学院に進学しました。しかしながらその先に待っていたのは、経済的な不安定さと将来のキャリアパスへの不安、うまくいかない研究と業績主義から来るプレッシャー、研究以外のゼミ運営や学生指導などから来る精神的負担、これらが複合的に作用した結果としてのメンタルヘルスの問題でした。

大学院生のメンタルヘルス問題をレビューした横路¹⁾によれば、メンタルヘルス問題は学术界全体に関わる問題でありながら、これまで「長らく暗黙のうちに放置されてきた」と指摘されています。いわゆる生存バイアスのため、メンタルヘルスの問題から進学や学位取得を諦めた学生の姿は、アカデミア内部ではなかなか可視化されません。博士後期課程への進学数の減少がよく話題にされますが、大学院生への支援策としては、メンタルヘルスに関わる総合的な支援が不可欠だと思います。

横路¹⁾は大学院生のメンタルヘルス問題の主な要因として、「劣悪なワークライフバランス」、「経済的な不安」、「当事者の声の上げづらさ」を挙げています。このうち「劣悪なワークライフバランス」の背景には、

行き過ぎた業績主義と、それに伴う長時間労働の常態化が指摘されています。

私自身を振り返ったとき、業績主義に基づくプレッシャーをもっとも実感した場面が、日本学術振興会の特別研究員制度（いわゆる学振）の申請時でした。DC1の申請は間に合わず、DC2には2回申請して2回とも落選したのですが、落選時に特に低く評価されたのが研究業績の不足でした。もちろん業績の少なさは、私の能力不足、努力不足の問題です。そう頭では理解しつつも、受かりやすい研究室や研究分野があるのではないかと、学振に受かるために早いうちから（指導教員の指示通りに？）論文を執筆しておくノウハウがあるのではないかと、などと妄想めいた考えが浮かんだり、「学振 落選」などのキーワードで検索し「落選しても大丈夫」などと述べる体験談に気を紛らわせたり、一方で同世代の他の学生に対する劣等意識に苛まれたりと、不毛な時間を過ごしました。当時の私にとって、本来研究支援のための制度である特別研究員制度が、優秀な学生とそうでない学生を振り分けるための選別制度に見えていました。そんな複雑な気分が沈む中で、知らずのうちに、大学教員を目指すという当初の目標はすり減っていきました。

学振の落選は「経済的な不安」の問題とも関わってきます。私自身に関して言えば、大学のティーチングフェロー制度や授業料減免のおかげで、経済的な困窮は免れていたと思います。それでも、学部で卒業した友人が社会人として給料を得ていたり、同世代の大学院生が特別研究員として支援を受けていたりする一方で、自身は数百万円の借金（第一種奨学金）を抱えていて、さらに授業料も払わなければならないことに、引け目のような感情を抱いていました。

メンタルヘルス問題の要因として「当事者の声の上げづらさ」の問題も指摘されていました。横路¹⁾は「精神疾患に対する偏見・マイナスイメージは研究の世界にも根強くある」ゆえに「研究者どうしの間で悩みを共有することや、関係者にサポートを求めることがま

*北海道立総合研究機構中央農業試験場



博士後期課程、大学院生、人材育成、キャリアパス、公設試験場、メンタルヘルス

すますます難しくなってしまう」と述べています。当時の私と同じような状況に悩んでいる学生は、現在も多くののではないのでしょうか。似たような立場に置かれた学生に対する「声を上げて大丈夫」というメッセージとして、この文章がすこしでも役立つことを願います。

メンタルヘルス問題に対して、「研究者どうしの間で悩みを共有すること」は、おそらくかなり有効な対策です。自戒を込めて述べますが、健全な研究生活のためには、研究室にひとりで籠もるのではなく、外部とのつながりを多く作ることが必要です。学会やSNSでの交流、友人との雑談、趣味のコミュニティへの参加など、さまざまな機会を積極的に活用すべきです。この点でいうと、農業農村工学会大会講演会で企画・運営に参加させていただいた「サマーセミナー」のイベントは、学生間の交流を実現するとても貴重な経験でした。学会には、学生の交流支援をぜひ継続していただきたいと願います。

III. キャリアパスとしての公設試験場

博士後期課程の最終年、将来の不安に悩まされていたときにたまたま現職の採用試験の公募をみつけました。試験を受けたときには農業試験場でどういう仕事ができるのかもいまひとつ理解していない状態でしたが、幸運にも採用いただけて、それから現在まで2年間中央農業試験場に勤めています。

現在は水田農業部という部署に所属し、水稻の多収要因解析課題を中心に、肥料試験などの各種栽培試験や、普及センターからの依頼分析業務などに取り組んでいます。大学時代の専攻は土壤物理学であり、現在の仕事とは分野が異なる部分も多いです。水稻の栽培も試験場に就職して初めて行いました。水稻の栽培管理方法や生理生態の知識、作物体の栄養分析法など、日々新しいことを学び直す毎日で、たいへんなことも多いですが、研究生活自体はとても充実しています。環境を変えるという意味でも、大学を一度離れたことは自身にとって大きな意味がありました。就職の不安がなくなったことも安定した研究生活の実現にとってはプラスでした。

公設試験場への就職を考えている人を対象に、大学での研究との違いを整理してみたいと思います。

公設試験場の研究の大きな目的は、地域や行政のニーズに応えること、つまり研究成果の現場実装と、それによる社会貢献です。この点で公設試験場と大学はスタンスがかなり異なります。研究の自由度という点では公設試験場はどうしても大学に比べ狭まりますが、より現場に近いところで研究に取り組むことがで

き、成果が直接に社会を変えていくという点では、大学にはない魅力を感じています。研究を通じて社会に貢献したいという方には絶好の職場だと思います。

一方で大学と比べると、研究設備が不十分だったり、購読している雑誌が限られていたり、不便なことが多いのも事実です。研究テーマについても「やりたい研究」より「与えられた研究」を優先しなければならない場合があるでしょう。やりたいことが定まっている人、先導的な研究を実施していきたい人には、これらが不満となる部分かもしれません。

「博士人材のキャリアパス」が本稿のテーマでした。公設試験場へのキャリアパスに当たって博士号は必要なのでしょうか。私個人の実感に即して言えば、博士後期課程の日々と、そこで得た研究遂行能力は、決して無駄ではなかったと考えています。採用試験においても、博士号取得見込みという経歴はプラスに働いたのではないかと想像します。一方で、博士後期課程での研究内容はいまの業務には直接関わってはおりません。これは研究分野が変わってしまえばある程度仕方がないことかと思えます。博士号についても、いまのところは、研究場面で直接役立っているという実感は薄いです。現職の採用試験において、博士の学位は必須要件ではありませんでした。学位取得を奨励する制度も特別設けられていないようです。まとめると、公設試験場へのキャリアパスに当たって博士号は、あると有利だが必要不可欠ではないもの、と位置づけられるのでしょうか。「博士人材の育成」という観点からはすこし寂しい結論かもしれません。学会を中心に、博士人材が活躍できる場面が少しずつ増えていくことを願っています。

最後になりますが、現在大学院生の方には、キャリアパスとして公設試験場という選択肢もぜひ検討いただければと思います。研究ができる機関は大学だけではないということ、大学がすべてではないということ、大学を出て初めて理解できたように思います。

引用文献

- 1) 横路佳幸：大学院生におけるメンタルヘルス問題について、人文×社会 1(1), pp.107~123 (2021)
[2021.4.19.受理]

紹介

小杉 重順 (正会員)



1991年 新潟県に生まれる
2019年 北海道大学大学院農学院博士後期課程単位取得退学
北海道立総合研究機構中央農業試験場
2020年 博士（農学）